

大学生と中学生の色彩感覚の相違

星野裕之・末永麻美*・清由佳里*

Difference of Color Emotion between University
and Junior High School Students

Hiroshi Hoshino, Asami Suenaga and Yukari Sei

(Received September 26, 2003)

1. はじめに

私たちは、さまざまな色彩に囲まれて生活している。自然に目を向けると木々の緑や大地の土色、空の青、また人工物に目を向けるとビルのグレーやアイボリー、信号機の赤・青・黄などが目に映る。多くの人は強く意識していないかもしれないが、目に映るすべての色彩は、私たちに何らかのメッセージを送りつづけ、私たちはそれをカラーイメージとして心に投影している。人は色彩を表現力豊かに伝えるメディアとして捉えている。

現在、パソコンや携帯電話の画面はより美しいカラー表示を求めて開発され、発達の一途をたどっている。また、季節が変わるたびに流行色が発表され、私たちはファッションやインテリアなどの影響を受けている。このように、色彩は私たちの生活にとどまらず、産業活動や社会活動においても重要な役割を担っており、色彩分野のより一層の発展が期待されている。

しかし、色彩に対する感情はまさに十人十色であり、ある一つの色についてさえ、一言で言い表すことは難しい。なぜなら、その人の年齢や性別、育ってきた環境により、色に対する感じ方が異なるからである。このような違いを明らかにすることは、様々な場における色彩の有効利用につながると考えられる。また、現在、色彩に関する多くの研究データが報告されているが、そのほとんどが東京・大阪・福岡などの大都市を対象にしたデータであり、一地方を対象にしたデータは皆無に等しい。

そこで本研究では、一地方である山口において、色彩感覚における世代差や男女差を調べ、その相違を明らかにすることを目的に、大学生と中学生、計220名を対象にSD法による視感実験を行った。そして、得られたデータから世代別・男女別にイメージプロフィールを作成し、t検定を行い、世代差・男女差について比較・検討した。また今回は因子分析を行い、被験者がどういう観点で色票を評価したかという感情軸を抽出した。これらの結果と考察について報告する。

2. 視感実験方法

2.1 イメージ対語の収集と選定

評価してもらいたいイメージ対語は、色相、トーン、嗜好性、空間評価、感情評価などに関する形容詞、形容動詞などの対になる言葉を参考^{1,2)}にして18対語に絞り込み、図1のようにSD

* 山口大学教育学部卒業生

法7段階評定尺度とした。今回は、中学生と大学生を比較することから、中学生にも理解しやすいイメージ対語の選定に配慮した。

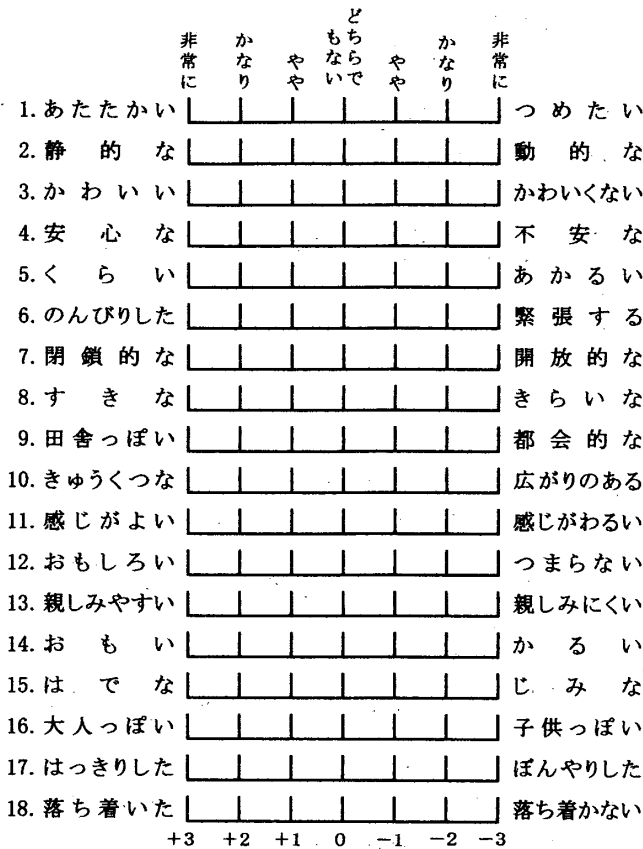


図1 イメージ対語

表1 各色のマンセル値

色名	マンセル値 (色相 明度/彩度)
赤	6.6R 4.8/13.1
青	5.7PB 4.9/9.0
緑	4.13G 5.89/9.32
黄	4.18Y 7.64/10.07
ピンク(P赤)	1.25YR 7.73/3.29
ペールブルー(P青)	8.69B 7.84/3.22
ペールグリーン(P緑)	3.16G 7.86/4.28
ペールイエロー(P黄)	6.11Y 8.71/4.43
グレー	0.5Y 7.8/0.5
背景色	1.0Y 7.9/0.4

2.2 色サンプル

色サンプルとして、1セット9色で、グレーの色厚紙(14×20cm)の中央に、赤、青、緑、黄、ピンク、ペールブルー、ペールグリーン、ペールイエロー、グレーの色票(9×5cm)を貼り合わせたものを用意した。それぞれの色のマンセル値を表1に示す。なお、ペールトーンの色名は簡略して、それぞれP赤、P青、P緑、P黄と表記することもある。

2.3 評価方法

視感評価実験を行った場所は、大学生については北窓の特定の部屋(北棟3階・被服構成室)、中学生は南東向きに窓のある各教室で行い、両者とも蛍光灯をつけた状態で評価させた。

被験者には、色票を見た印象を直感的に評価するよう指示し、1つの色票を見ながら18対語を評価してもらい、これを9色について同様の方法で行った。

また、視感評価ののち、9色の色票のなかで、一番好きと思う色票の色と一番嫌いと思う色票の色を選んでもらう嗜好評価も行った。

実験期間は、大学生は2000年11月2日から12月1日までの30日間、中学生は同年11月13日、11月14日、および11月22日の3日間であった。実験時刻は11時から16時までで、曇り空の時をねらって行った。被験者は山口大学の学生101名(男性48名、女性53名)、附属光中学校の2年生119名(男子52名、女子67名)の計220名であった。

2. 4 解析方法

今回の視感実験で得られたデータについて、「非常に」「かなり」「やや」および「どちらでもない」をそれぞれ±3、±2、±1および0(図1)として平均値をとり、イメージプロフィールを作成して全体のイメージをつかみ、次に大学生・中学生別、男女別に分析することで、世代間、男女間でどの程度違いが出るかを検討した。さらに因子分析によって、今回の実験で被験者がどういう観点で色票を評価したかという感情軸を抽出した。

3. 結果と考察

3. 1 各色のイメージ

各イメージ対語について平均値を算出し、これを色ごとにプロットしたイメージプロフィールを作成した。一例として図2に赤、青、緑、黄色のイメージプロフィールを示し、今回の視感実験で行ったすべての色で評価の大きかった上位5つまでのイメージ語を表2にまとめた。

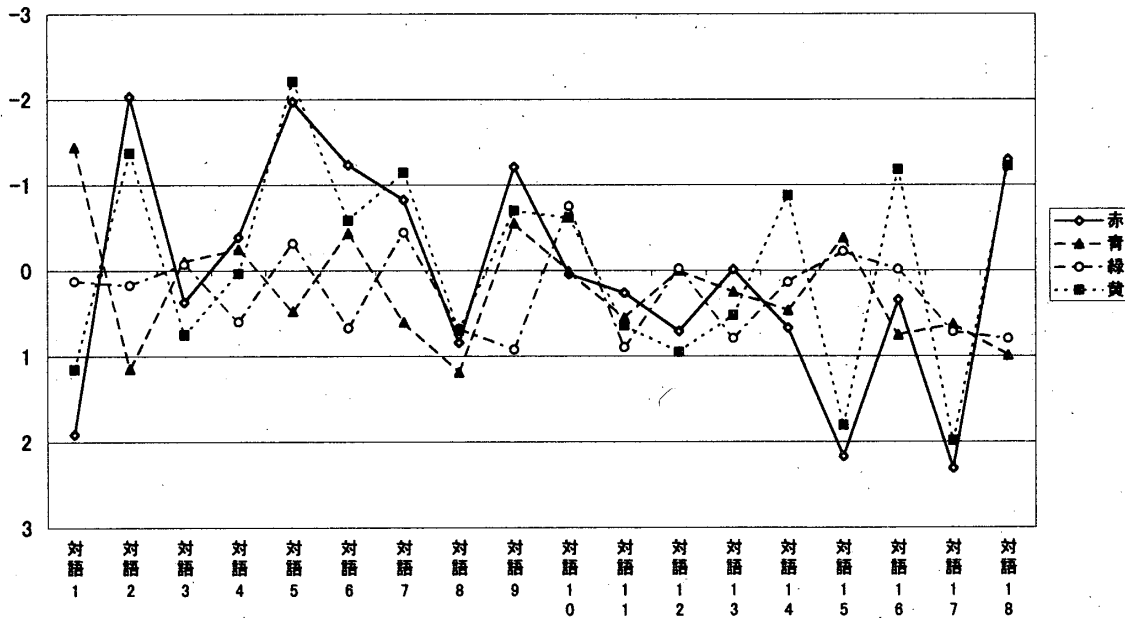


図2 イメージプロフィール (原色)

表2 カラーイメージ

色	イメージ				
	1位	2位	3位	4位	5位
赤	17.はっきりした	15.はでな	2.動的な	5.あかるい	1.あたたかい
青	1.つめたい	8.すきな	2.静的な	18.落ち着いた	16.大人っぽい
緑	9.田舎っぽい	11.感じがよい	18.落ち着いた	13.親しみやすい	10.広がりがある
黄	5.あかるい	17.はっきりした	15.はでな	2.動的な	18.落ち着かない
ピンク(P赤)	3.かわいい	6.のんびりした	4.安心な	17.ぼんやりした	14.かるい
パールブルー(P青)	2.静的な	17.ぼんやりした	18.落ち着いた	1.つめたい	15.じみな
パールグリーン(P緑)	17.ぼんやりした	6.のんびりした	11.感じがよい	14.かるい	18.落ち着いた
パールイエロー(P黄)	14.かるい	6.のんびりした	5.あかるい	17.ぼんやりした	11.感じがよい
グレー	2.静的な	1.つめたい	15.じみな	12.つまらない	3.かわいくない

ここで、各色に対するイメージは概ね次のようなものであった。

<赤>

赤は「はっきりした、はでな、動的な、あかるい、あたたかい」というイメージをもたれている。これらは赤のもつ華やかさや力強さからくるものである。全体的に反応が大きく、後述する黄と似た反応を示した。

<青>

青は「つめたい、すきな、静的な、落ち着いた、大人っぽい」というイメージをもたれている。本実験に用いた9色のうち8.「すき」というイメージ語が上位5位以内(表2)に入ったのは青だけであり、これは青が日本で好まれる色として白についで2位である³⁾ことに当てはまる。

<緑>

緑は「田舎っぽい、感じがよい、落ち着いた、親しみやすい、広がりのある」というイメージをもたれている。「田舎っぽい、広がりのある」の値が大きいのは、緑の田園イメージがストレートに現れたと言える。また「親しみやすい、落ち着いた」の値が大きいのは、実験場所が山口県であり緑色から連想される森林や田園が多い場所で、日頃から見慣れているからと考えられる。しかしながら、緑は全体的に反応が小さく、最も反応の大きかった対語9.「田舎っぽい—都会的な」でも平均値で0.92であった。

<黄>

黄は「あかるい、はっきりした、はでな、動的な、落ち着かない」というイメージをもたれている。黄は“快活”“元気”を表す色とされているので、これらのイメージ対語はそれをストレートに表している。全体的に反応が大きく14.「おもい—かるい」、16.「大人っぽい—子供っぽい」の対語以外は前述した赤とよく似た反応を示した。しかし16.「大人っぽい—子供っぽい」で黄が赤とは反対の「子供っぽい」と評価されたのは、黄は小学生が多く持つ黄色の雨傘やレインコートを連想させるからであると考えられる。

<ピンク>

ピンクは「かわいい、のんびりした、安心な、ぼんやりした、かるい」というイメージをもたれていて、他のイメージ対語をみても全体的に評価の良い色であった。ピンクは日本の色名では桃色あるいは桜色であり、花のもつ優しさやかわいらしさを漂わせる色であるので、先にあげたイメージ対語はこのことによく当てはまっている。また全体的に後述するペールイエローととてもよく似た反応を示した。

<ペールブルー>

ペールブルーは「静的な、ぼんやりした、落ち着いた、つめたい、じみな」イメージをもたれていて、地味イメージが目立っていた。全体的に反応の小さいイメージ対語が多く、ペールトーンの中ではペールブルーだけ他の3色と異なった反応を示した。

<ペールグリーン>

ペールグリーンは「ぼんやりした、のんびりした、感じがよい、かるい、落ち着いた」イメージをもたれている。これらはペールグリーンが、うららかな春や新緑のなかでの森林浴を想像させる色であることをストレートに表している。また1.「あたたかい—つめたい」、2.「静的な—動的な」以外はピンク・ペールイエローととてもよく似た反応を示した。

<ペールイエロー>

ペールイエローは「かるい、のんびりした、あかるい、ぼんやりした、感じがよい」イメー

ジをもたれている。他のイメージ対語をみても全体的にプラス評価の色であった。パールイエローはひよこの産毛、ベビー用品、タオル類、野の花など普段見かける多くのものに存在しており、かるく、あたたかく、やわらかな表情をかもし出している。日常に多く存在し、誰にでも安心して受け入れられやすい色ということが、パールイエローのプラス評価につながったと考えられる。

<グレー>

グレーは「静的な、つめたい、じみな、つまらない、かわいくない」イメージをもたれている。主に地味イメージに強く反応しており、これは無彩色であるがゆえの見た目の単純反応と、グレーから想像させるコンクリートやオフィス機器の人工的な質感に起因していると考えられる。また、9.「田舎っぽい—都会的な」という対語以外は、マイナス評価であった。

3. 2 色彩イメージの世代間（大学生と中学生）の差

前項では、被験者全体の平均データから各色のイメージを考察したが、この項では中学生と大学生との色彩感覚に違いがあるかどうかを調べることを目的としてイメージプロフィールを作成した。一例として赤色についてのイメージプロフィールを図3に示す。

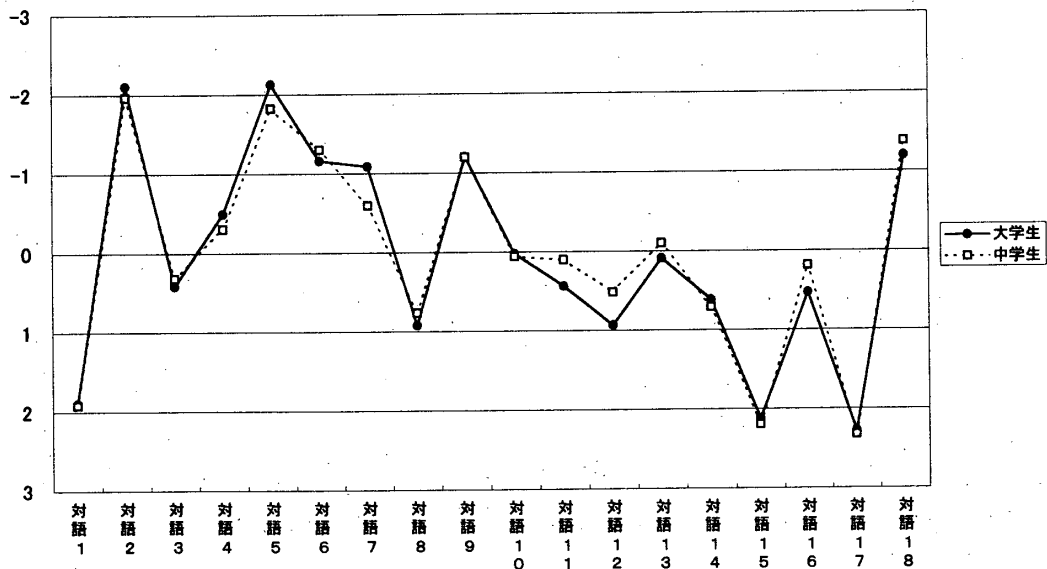


図3 世代別イメージプロフィール（赤）

イメージプロフィールに示された平均値だけを見ると、赤も含めて9色とも世代間に著しい違いは見られなかった。そこで、中学生と大学生の有意性をt検定で調べ、表3に危険率0.05以下および0.01以下をそれぞれ*印および**印で示した。有意性を示した対語が最も多かったのは緑で6対語、次いでグレーが3対語、赤とパールグリーンが2対語、黄、ピンク、パールブルー、パールイエローがそれぞれ1対語、青については有意差がみられなかった。以下に各色ごとに詳細を述べる。

<赤>

「あたたかい、動的、はでな、あかるい、はっきりした」色という印象が持たれている。t検定によると、7.「閉鎖的な—開放的な」、12.「おもしろい—つまらない」の対語に差がみられた。大学生の方が、より「開放的でおもしろい」色だと感じている。

表3 世代間の有意性検定結果（t検定）

	赤	青	緑	黄	ピンク	P青	P緑	P黄	グレー
1. あたたかいーつめたい									** →
2. 静的なー動的な									
3. かわいいーかわいくない									
4. 安心なー不安な									
5. くらいーあかるい			** →	* ←	* →				
6. のんびりしたー緊張する									
7. 閉鎖的なー開放的な	* →								* ←
8. すきなーきらいな									
9. 田舎っぽいー都会的な			* →			** →	** →	* →	** →
10. きゅうくつなー広がりのある									
11. 感じがよいー感じがわるい			** ←						
12. おもしろいーつまらない	* ←								
13. 親しみやすいー親しみにくい			* ←						
14. おもいーかるい			** →						
15. はでなーじみな							* →		
16. 大人っぽいー子供っぽい									
17. はっきりしたーぼんやりした			* →						
18. 落ち着いたー落ち着かない									

矢印:中学生に比べて大学生はどちらにシフトしたかを示す

<青>

「つめたい、静的、都会的、じみな、すきな」色という印象を持たれていて、検定による差は認められなかった。9色の中ではマイナスイメージの評価であるが、この色を好むという人も多い。

<緑>

「開放的な、田舎っぽい、広がりのある、感じがよい、親しみやすい」色という印象がもたれている。t検定によると5.「くらいーあかるい」、9.「田舎っぽいー都会的な」、11.「感じがよいー感じがわるい」、13.「親しみやすいー親しみにくい」、14.「おもいーかるい」、17.「はっきりしたーぼんやりした」の対語に差がみられた。大学生の方が、より「明るくて軽く、感じがよい」色だと感じている。中学生は、「田舎っぽくて、おもい」と感じる傾向が強いが、周りを山や自然が豊かな環境に育った光の中学生にとって、緑は「田舎」の象徴とも言える色であり、都会の華やかな、洗練されたイメージに憧れを抱く年頃には重苦しいイメージが強かったと考えられる。

<黄>

「あたたかい、動的、明るい、はで、はっきりした」色という印象が持たれている。検定では、5.「くらいーあかるい」の対語で差がみられた。中学生の方がより、「あかるい」色だと感じている。

<ピンク>

「かわいい、安心な、あかるい、かるい、ぼんやりした」色という印象が持たれている。検定によると、5.「くらいーあかるい」の対語で差がみられた。大学生の方がより、「あかるい」色だと感じている。

<ペールブルー>

「つめたい、静的な、閉鎖的な、ぼんやりした、落ち着く」色という印象がもたれている。検定の結果、9.「田舎っぽいー都会的な」の対語で差がみられた。大学生の方が、より「都会的な」色だと感じている。

<パールグリーン>

「のんびりした、感じがよい、かるい、ぼんやりした、落ち着く」色という印象をもたれている。t検定によると9.「田舎っぽいー都会的な」、16.「大人っぽいー子供っぽい」の対語に差がみられた。緑と同じく、中学生の方がより、「田舎っぽい」と感じている。

<パールイエロー>

「くらい、のんびり、広がりのある、かるい、ぼんやりした」色という印象をもたれている。9.「田舎っぽいー都会的な」の対語に世代間の差がみられた。

<グレー>

「つめたい、静的な、かわいくない、つまらない、じみ」という印象がもたれている。検定の結果、1.「あたたかいーつめたい」、7.「閉鎖的なー開放的な」、16.「田舎っぽいー都会的な」の対語に差がみられた。大学生の方が、「つめたく、閉鎖的で都会的」だと感じている。都会と言えば自由で開放的なイメージが持たれていると思われたが、その華やかさの陰にある都会の厳しい現実が「つめたくて閉鎖的」というイメージに結び付いたと考えられる。

3. 3 色彩イメージの男女間の差

前項では、世代間の色彩イメージの相違について考察したが、この項では男女間のイメージの違いを検討することを目的に、男女別の平均値をプロットしたイメージプロフィールを作成し、t検定により男女間の有意性を調べた。ここに、一例として赤色のイメージプロフィールを図4に示し、9色すべての結果を表4にまとめた。原色、ペールトーンとも赤、黄の暖色系の色に対して、男女間の有意性を示した対語の個数が最も多く（赤：8対語、ピンク：10対語、黄：7対語、パールイエロー：8対語）、次いで寒色系（青：5対語、パールブルー：6対語）、最後に中間色の緑系（緑：なし、パールグリーン：3対語）であった。また、原色よりもペールトーンの方がやや多いようである。無彩色であるグレーは7対語に有意差があった。以下に各色ごとに詳細を述べる。

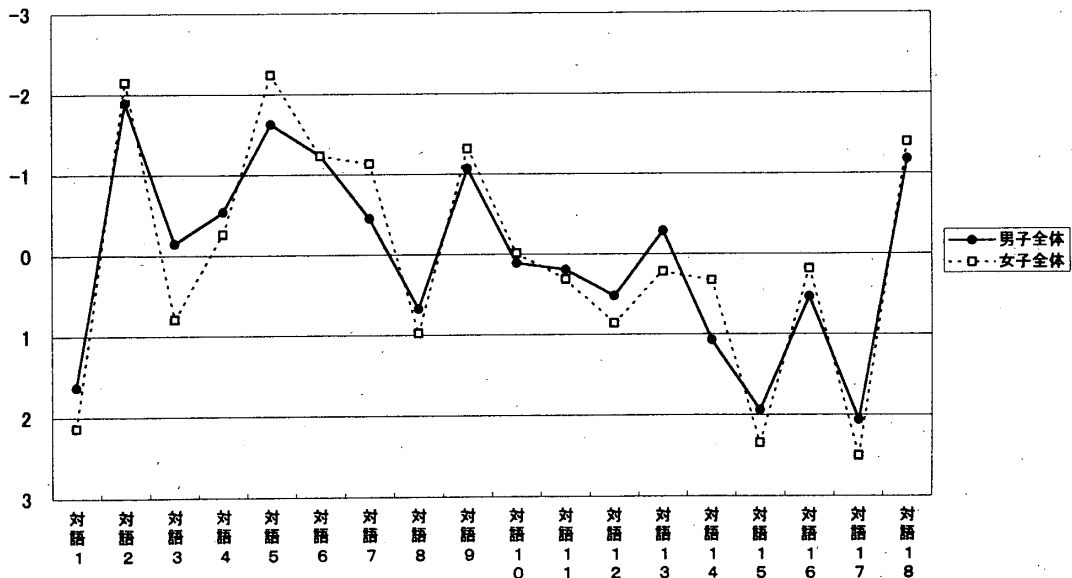


図4 男女別イメージプロフィール (赤)

表4 男女間の有意性検定結果 (t 検定)

	赤	青	緑	黄	ピンク	P青	P緑	P黄	グレー
1. あたたかいーつめたい	** ←				** ←			* ←	
2. 静的なー動的な		* ←		** →					** ←
3. かわいいーかわいくない	** ←			* ←	** ←				
4. 安心なー不安な					** ←			** ←	* →
5. くらいーあかるい	** →								** ←
6. のんびりしたー緊張する		* →		** →	* ←				
7. 閉鎖的なー開放的な	** →	** ←							* ←
8. すきなーきらいな		* →			** ←	** ←		** ←	
9. 田舎っぽいー都会的な									
10. きゅうくつなー広がりのある								** →	** →
11. 感じがよいー感じがわるい					** ←	* ←		** ←	
12. おもしろいーつまらない		* →		** ←					
13. 親しみやすいー親しみにくい	* ←				** ←		** ←	** ←	
14. おもいーかるい	** →				* →				
15. はでなーじみな	* ←			** ←		* →			
16. 大人っぽいー子供っぽい						** ←	* ←		** ←
17. はっきりしたーぼんやりした	** ←			** ←	** →	* →	* →	** →	* →
18. 落ち着いたー落ち着かない				** →	** ←	** ←		** ←	

矢印:男子に比べて女子はどちらにシフトしたかを示す

<赤>

女子の方がより「あたたかい、かわいい、あかるい、開放的な、親しみやすい、はでな、はっきりした」というプラス評価をしていた。これは赤がランドセルや学校の上履き・財布などで「女性用」を示す色として多用されるため、赤に女性イメージが強く、女子は赤を馴染み深い色として捉えているためであると考えられる。

<青>

女子の方がより「静的な、緊張する、閉鎖的な」と感じ、男子の方がより「すきな、おもしろい」と感じており、男子の方が青をプラス評価していた。これは青が「精悍な、雄々しい」という男性をイメージさせる色でもあり、また男性用トイレや上履きなどで「男性用」を示す色として多用されるため、男性イメージが強く、男性の方が青を馴染み深い色として捉えているためであると考えられる。

<緑>

t 検定によると、緑はどの対話においても男女間に差がみられなかった。

<黄>

女子の方がより「動的な、かわいい、緊張する、おもしろい、はでな、はっきりした、落ち着かない」というイメージをもっていた。

<ピンク>

女子の方がより「あたたかい、かわいい、安心な、のんびりした、すきな、感じがよい、親しみやすい、かるい、ぼんやりした、落ち着いた」と感じており、プラス評価が目立った。これらから、女子はピンクに対しロマンチック、あるいはメルヘン的なイメージを強めに抱いていると言える。また9色のなかで最も男女差のみられた色であったことは、ピンクは女性的なイメージを最も強く抱かれる色とされることに起因している。

<ペールブルー>

女子の方がより「すきな、感じがよい、じみな、大人っぽい、ぼんやりした、落ち着いた」と感じており、若干の地味イメージをもちながらも、女子の方が男子よりもプラスの評価をし

ている。

<パールグリーン>

男子の方がより「子供っぽい」と感じ、女子の方がより「親しみやすい、ぼんやりした」と感じている。しかし、緑ほどではないがパールグリーンの男女差は、他の色に比べるととても小さいものであった。よって緑系は男女差の出にくい色相とすることができる。

<パールイエロー>

女子の方がより「あたたかい、安心な、すきな、広がりのある、感じがよい、親しみやすい、ぼんやりした、落ち着いた」と感じていた。パールイエローに対しては女子の方が好意的で、幸福なイメージを抱く傾向がある。

<グレー>

女子の方がより「静的な、不安な、くらい、閉鎖的な、広がりのある、大人っぽい、ぼんやりした」と感じている。グレーに対する評価は男子の方が良好であった。

3. 4 嗜好評価

18対語による評定をすべての色について行った後、一番好きと思う色と一番嫌いと思う色を選んでもらう嗜好評価も行った。その結果を図5に示す。

被験者全体で見ると(図5(a))、青が好きと答えた人が一番多く、次にパールブルーが多かった。日本人は青を好む³⁾という典型的な結果であるといえる。嫌いな色は黄色と答えた人が一番多かったが、それと同程度にグレーも嫌われており、嫌いな色はこの2色に集中した。

男女別で見ると(図5(b)(c))、男子では青が好きと答えた人が圧倒的に多く、嫌いな色はグレーが多かった。女子では、ピンクが好きと答えた人が一番多く、一番嫌われていた色は男子と同様グレーであった。ここで興味深いのは、男子ではグレーの次にピンク、赤が嫌いという人が多かったが、女子では、青、パールブルーが好きと答えた人が多かったことである。私たちは、幼児期のころに、男の子は青、女の子は赤という固定観念を植え付けられがちであり、男子のこの結果においては、そのことが大きな影響を与えていると思われる。しかし、女子に

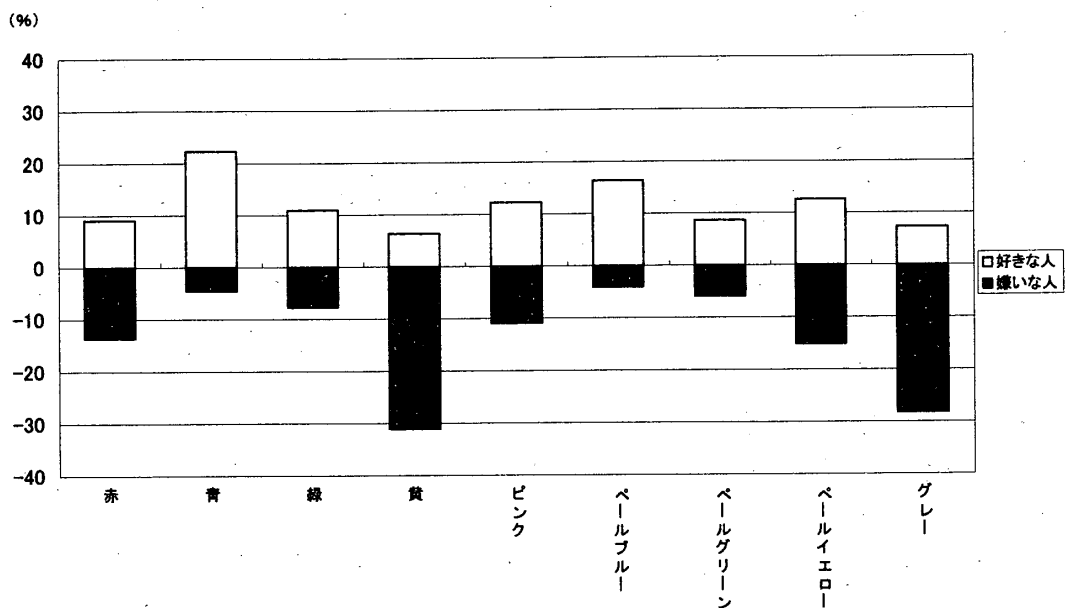


図5 (a) 嗜好評価結果 (全体)

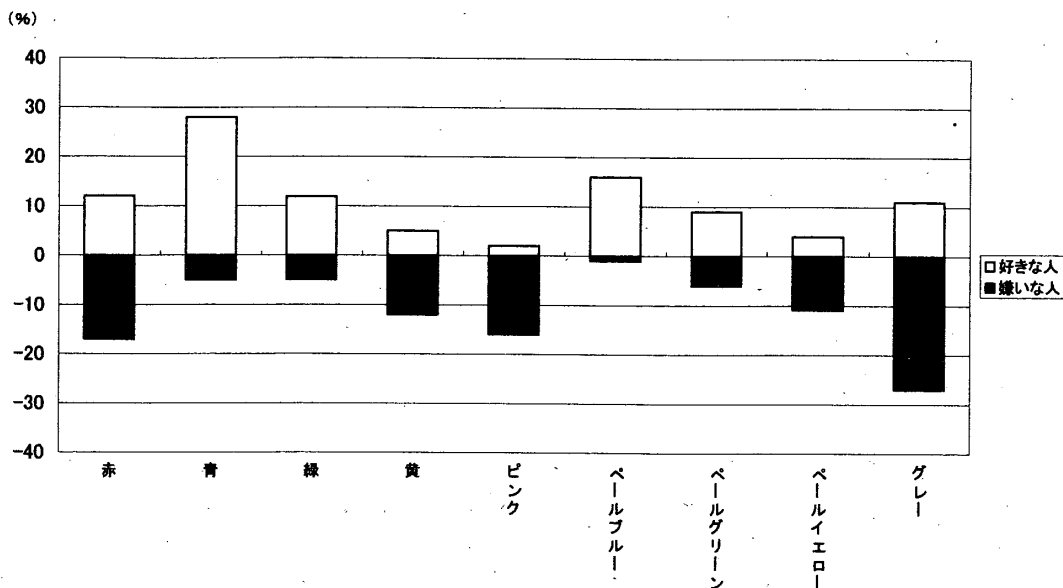


図 5 (b) 嗜好評価結果 (男子)

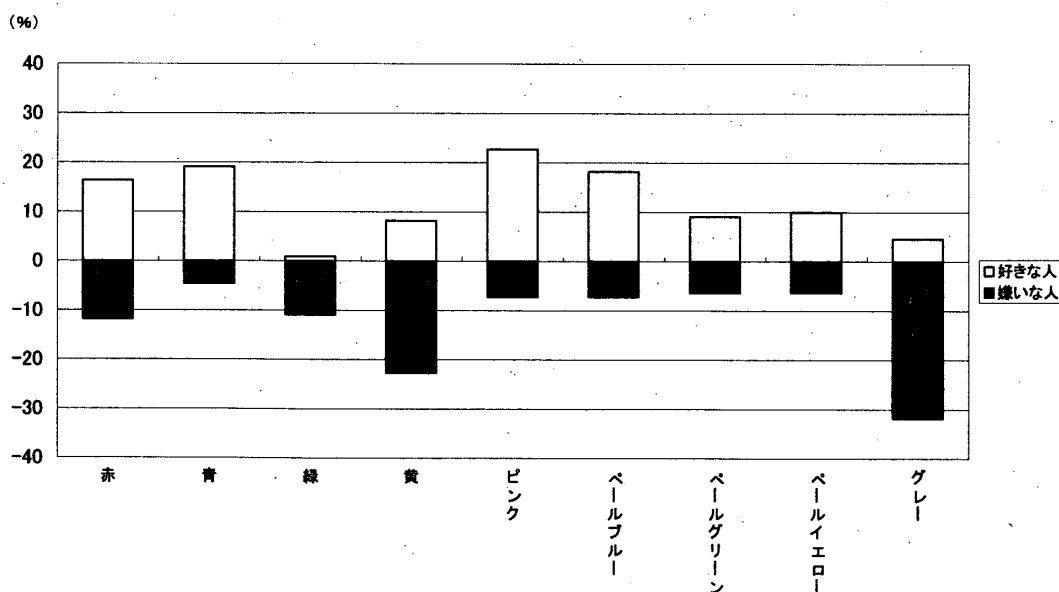


図 5 (c) 嗜好評価結果 (女子)

については、赤はもとより青やペールブルーにも好意的な印象が強く、男子よりも色に対する柔軟性があると言える。

3. 5 色彩イメージの因子分析

得られたデータから、世代別、性別、色別に対語ごとの平均値を算出し、それをもとに因子分析を行った。その結果は以下のとおりである。

表 5 は今回の被験者における主要因子の負荷量を示したものである。固有値が 1 以上のものが 3 因子あり、この 3 因子までの累積寄与率が 90.30%であったので、この 3 因子でもって、今回使用した色票のイメージをほぼ説明できると考え、この 3 因子について、軸の解釈をしやすい

いようにバリマックス回転を施した。以上の方法で抽出されたそれぞれの因子について次のように解釈した。

表5 各イメージ対語の因子負荷量 (バリマックス回転後)

	因子1 心地よさ	因子2 活動性	因子3 嗜好性
10.きゅうくつな—広がりのある	-0.9411	0.1539	0.1474
6.のんびりした—緊張する	0.9305	0.3029	-0.0590
4.安心な—不安な	0.9114	-0.1262	-0.3140
14.おもい—かるい	-0.8809	0.0778	-0.0545
13.親しみやすい—親しみにくい	0.8282	-0.1930	-0.4556
11.感じがよい—感じがわるい	0.8020	-0.1324	-0.5506
3.かわいい—かわいくない	0.7023	-0.4546	-0.3766
9.田舎っぽい—都会的な	0.6760	0.3228	0.0418
2.静的な—動的な	0.1740	0.9600	0.0769
15.はでな—じみな	-0.2157	-0.9586	-0.1385
5.くらい—あかるい	-0.2313	0.9492	0.0704
1.あたたかい—つめたい	0.3381	-0.8759	-0.0951
12.おもしろい—つまらない	0.1262	-0.8690	-0.3721
18.落ち着いた—落ち着かない	0.4556	0.8425	-0.2617
7.閉鎖的な—開放的な	-0.5267	0.8179	0.1011
17.はっきりした—ぼんやりした	-0.6234	-0.6757	-0.0733
16.大人っぽい—子供っぽい	-0.6478	0.6594	-0.0730
8.すきな—きらいな	0.1735	-0.1260	-0.9650
固有値	8.52	6.42	1.32
寄与率(%)	47.34	35.64	7.32
累積寄与率(%)	47.34	82.98	90.30

第1因子は、10.「きゅうくつな—広がりのある」、6.「のんびりした—緊張する」、4.「安心な—不安な」などの因子負荷量が大いことから、「心地よさ」の因子と名付けた。同様に第2因子は、2.「静的な—動的な」、15.「はでな—じみな」、5.「くらい—あかるい」などの負荷因子量が大いことから、「活動性」の因子、第3因子は、8.「すきな—きらいな」から「嗜好性」の因子とそれぞれ名付けた。つまり、今回の視感実験では、被験者はこの3つの因子で色を判断していたと解釈できる。

次にこの因子軸上に色をプロットしたものが図6(a)~(c)に示す因子得点グラフである。ここで、因子1軸のプラス方向は「心地よい」、マイナス方向は「心地わるい」を表し、以下同様に、因子2軸は「静的な—活動的な」を、因子3軸は「きらいな—すきな」をそれぞれ表す。

これらのグラフによると赤は活動的ではあるが、心地わるいと評価している。しかし、嗜好性の因子をみると、中学生男女(中男および中女)、大学生男子(大男)は好きでも嫌いでもないが、大学生の女子(大女)だけが好きと評価している。青は、静的で心地わるいと評価している。しかしながら、嗜好性の因子では、男女に多少差があるものの、好きと評価され、9色の中では一番好まれた色である。黄は活動的と評価しているが、男子はやや嫌う傾向がある。ピンク(P赤)は嗜好性では、男子は嫌い、女子は好きと分かれたが、ともに心地よい色と評価した。パールブルー(P青)は静的と評価したが、男子はどちらかという嫌い、女子は好きと評価している。パールグリーン(P緑)は心地よいと評価した。パールイエロー(P黄)はピンクと同様、男子は嫌い、女子はやや好きな方と分かれたが、ともに心地よいと評価した。ペールトーンは、どの色も女子は好き、男子は嫌いと評価しているのが特徴的であ

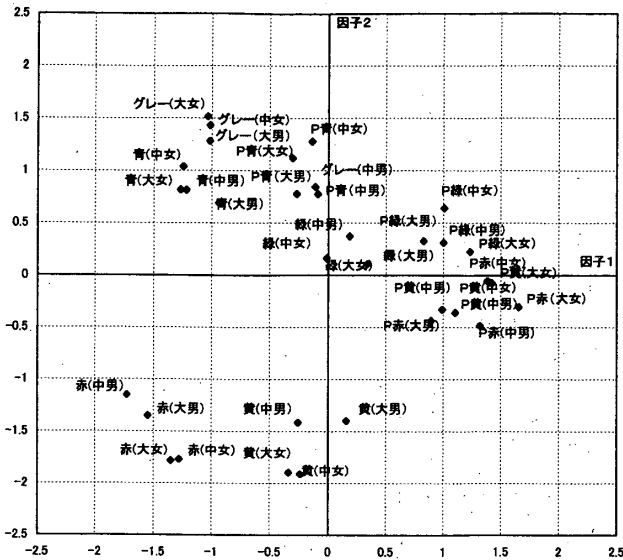


図 6 (a) 因子得点グラフ

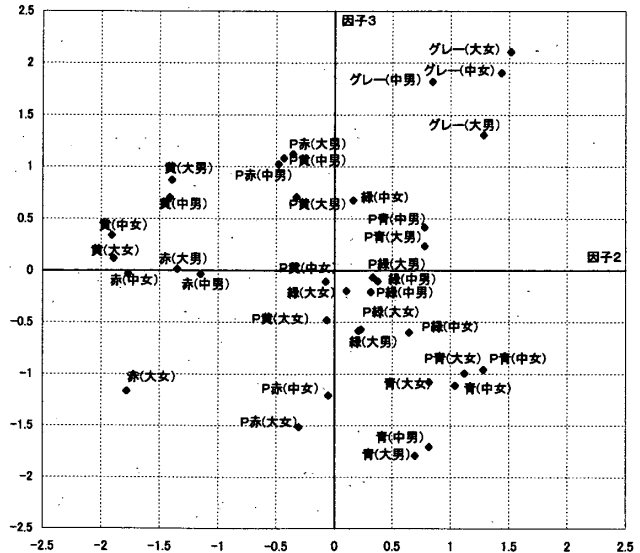


図 6 (b) 因子得点グラフ

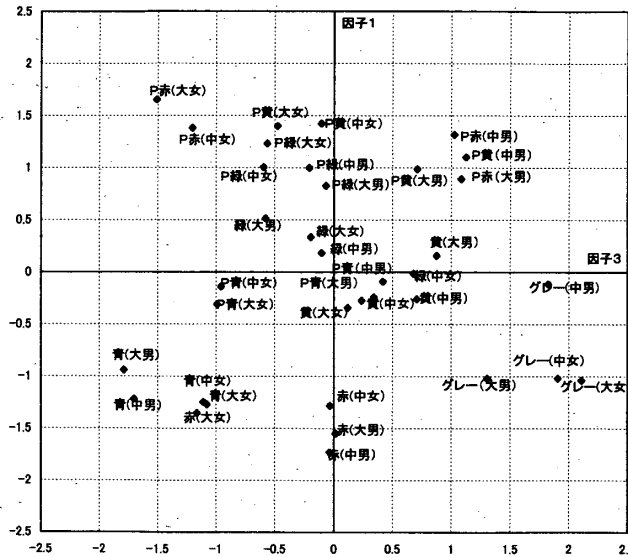


図 6 (c) 因子得点グラフ

る。無彩色のグレーは静的で心地わるく、嫌いな色と評価した。

以上のように、嗜好性の因子において男女の好き嫌いに違いが見られたので、図7に属性別因子得点のグラフを示した。これは、大学生男子、大学生女子、中学生男子、中学生女子それぞれの因子得点を平均してプロットしたものである。これによって、今回の被験者が、9色の色票全体にどのようなイメージを持ったかがわかる。図7(a)では、それぞれがほぼグラフの真ん中に集まり、「心地よさ」と「活動性」の因子は、男女間、世代間で違いがほとんどないことを意味している。しかし、図7(b)および(c)をみると、「嗜好性」の因子において、ゼロを境に男女逆の評価になっている。つまり、今回の色票について男子は「きれい」、女子は「すき」というイメージを持ったということである。

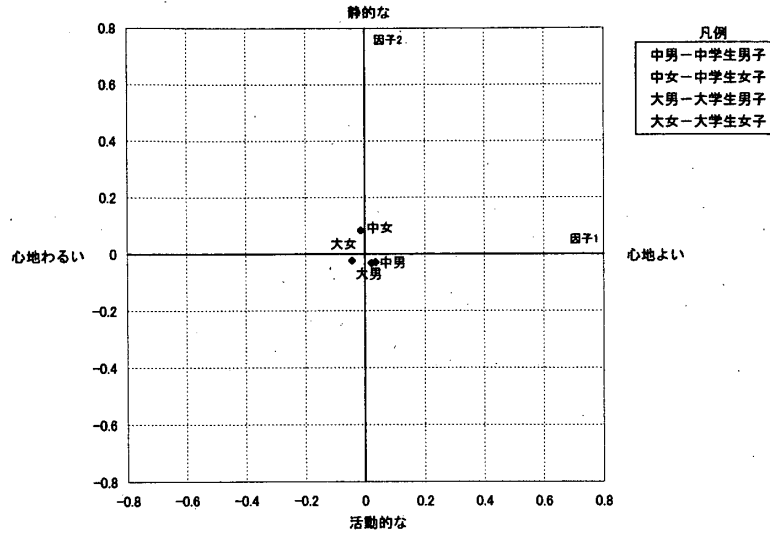


図 7 (a) 因子得点の属性別平均グラフ

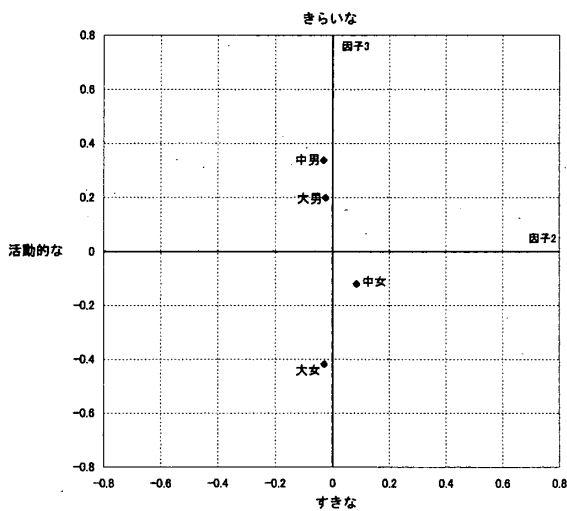


図 7 (b) 因子得点の属性別平均グラフ

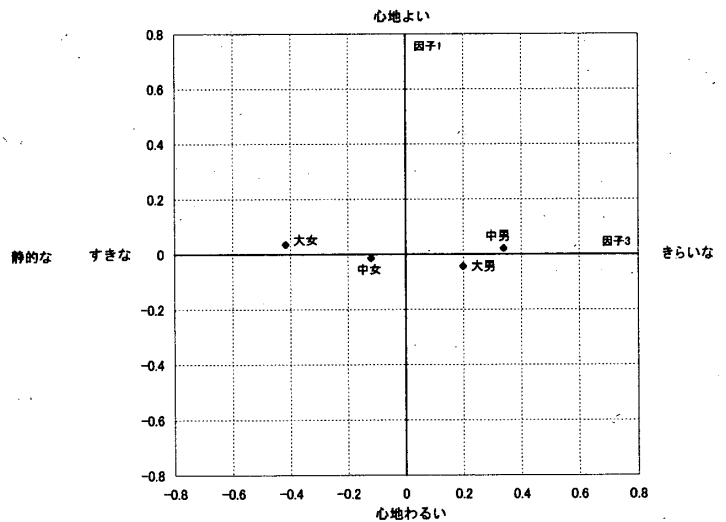


図 7 (c) 因子得点の属性別平均グラフ

4. まとめ

本研究では山口という一地方を対象として、一地方の色彩に対するイメージおよび感覚を把握した上で、色彩感覚において成長段階である中学生とほぼ完成に近い大学生という世代間に差が生じるか否かを確認し、その要因を明らかにするというを目的として視感評価実験を行った。

ところが、今回の視感実験では中学生と大学生との世代間の差については、イメージプロフィールからは大きな差が見られなかった。

一方、男女間における差については、イメージプロフィール（平均値）からもその差がはっきり読み取れた。その有意性を調べると、赤、ピンク、黄、パールイエローの暖色系の色で有意差を示す対語が一番多く、男女差が著しいことがわかった。

色嗜好評価では好きな色は青、嫌いな色はグレーという結果となり、日本人が青を好み、無彩色のなかでも白と黒の中間色であるグレーは嫌われやすいという、東京都内で行われた調査結果³⁾と一致した。また、青・パールブルーは男女を問わず好まれるが、赤・ピンクでは、女子は好むが、男子は嫌うという性差が現れた。これは、男女を区別する色として、女子は赤、男子は青という固定観念によるものと考えた。

さらに、因子分析の結果、今回の被験者は、「心地よさ」「活動性」「嗜好性」という3つの因子でもって色を判断していたと解釈できた。因子得点グラフからは、各色のイメージプロフィールから得たイメージとほぼ一致する結果が得られたが、その特徴として嗜好性の因子において男女に違いが見られたので、属性別因子得点を確認したところ、今回この9色の色票に対して、男子はどちらかと言えば「嫌い」、女子はどちらかと言えば「好き」というイメージを持って判断していたことがわかった。

謝辞

本研究をすすめるにあたり、中学生への視感実験実施にご協力いただきました山口大学教育学部附属光中学校教諭・新村敦子先生に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 富家 直：聖心女子大論叢 Vol.31、32合併号 pp.65-98 (1969)
- 2) 岡部慶三監修 社団法人日本流行色協会編：色のイメージ事典、同朋舎、1991
- 3) 近江源太郎、柳瀬徹夫、椿 文雄：日本人の色彩嗜好 (4)、色彩研究、Vol.28、No.2、pp 2-9 (1981)